

## 大学生の死生観・来世観

小西吉呂

### 目次

- 一 はじめに
- 二 調査の結果と分析
- 三 おわりに

### 一 はじめに

筆者は、昨年7月に脳死と臓器移植に関する学生の意識調査を行ない、その結果の一部を「沖大法学」誌上で公表する機会に恵まれた。<sup>(1)</sup>本稿では、その際公表を控えた死生観・来世観や死に対する一般的イメージを問う質問と、それへの回答の分析結果について報告させて頂く。これらの諸結果は、それ自身、民俗学的には非常に興味深いものであるし、また、脳死と臓器移植の基底に横たわる日本的あるいは沖縄的意識の一端を窺い知るうえでも、有意義な知見をもたらしてくれるであろうことが期待される。

- (1) 拙稿「大学生の脳死と臓器移植をめぐる意識」沖大法学11・12合併号107頁以下(1991)。

### 二 調査の結果と分析

1. 先の拙稿で詳しく触れた通り、調査は、県内の大学で法学関連科目を受講中の2年次～4年次大学生240名に対して、調査票による集合調査という形で行なわれた。その内、有効回答者は236名である。有効回答者の男女別

内訳は、男子185名、女子51名であった。

2. 本稿で分析する調査票の質問は、死生観・来世観や死に対する一般的イメージを問う次の3質問である。

問1 さっそくですが、あなたは死後の世界の存在を信じますか。

- 1 信じる
- 2 信じない
- 3 わからない

問1の①「信じる」と答えた人はその理由を書いてください。

理由：

問1の②「信じない」と答えた人はその理由を書いてください。

理由：

問2 あなたは死ぬとどうなると思いますか。

- 1 無になる
- 2 魂が他の世界へ行く
- 3 わからない
- 4 その他 ( )

問3 あなたは誰かにみとられて死ぬのがよいですか、それとも誰にもみとられずに死ぬのがよいですか。

- 1 誰かにみとられて死ぬのがよい
- 2 誰にもみとられずに死ぬのがよい
- 3 どちらともいえない
- 4 わからない

問3の①「誰かにみとられて死ぬのがよい」と答えた人はその理由を書いてください。

理由：

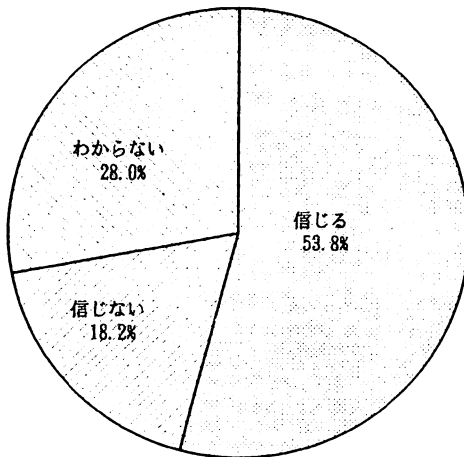
問3の②「誰にもみとられずに死ぬのがよい」と答えた人はその理由を書いてください。

理由：

3. 以下では、先の拙稿と同じく(1)全学生、(2)県内男子学生と県内女子学生の比較、(3)県内学生と県外学生の比較、という順序で上記の質問に対する回答結果(付表1、2、3)を提示し、これらについて若干の分析を試みたい。

### (1) 全学生の意識

① 死後の世界の存否に関する問1(図①)では、「信じる」が過半数を占めている。意外な結果か、それとも十分納得できる結果か。また、今日の世相



図① あなたは死後の世界を信じますか。

の反映であろうか、それともありふれた世間一般の風潮であろうか。

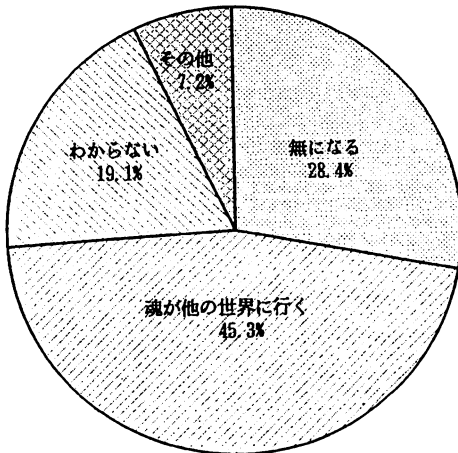
「信じる」理由をたずねる問1の①では、マスコミや友人・知人などからの情報によるとする学生が少なくない。それ以外には、「何となく」信じる者、肉体と霊魂あるいは身体と心との二元性を根拠とする者、本人の帰依する宗

教を挙げる者、生まれ育った地方からの影響を語る者、などが目につく。

やや特異と思われるものに、「死後の世界を見たことがあるから」や「私および家族はその世界を見たことがあります。真面目な答えです」がある。周知の通り、近時、臨死体験やこれに類する話題がテレビ、雑誌などのマスコミをにぎわしている。『光の彼方に—死後の世界を垣間見た人々—』といった、刺激的な題名の出版物も数多い。医科学や超心理学など、学術的専門的にもこの方面の研究が蓄積されつつある。そうした動向のもとでは、上記の学生の理由も、特異ではあっても無視できるものではない。ただ、具体的にどのような世界を見たのかはわからない。金縛りや予知夢の類も「その世界」に入るとすれば、それはかなり広い内容を含むものとなろう。なお、「信じる信じないではなく、必ずあると考えるべき」と主張する学生もいる。これなどは、キューブラー・ロスが死後生存を信じるのではなく知っていると断言するのに似ている。

他方、「信じない」理由をたずねる問1の②では、死後の世界の非科学性や虚構性を理由とする者が目立っている。

② 問2 (図②) では、「魂が他の世界へ行く」が半数近くを占めている。



図② あなたは死ぬとどうなると  
思いますか。

この結果は、問1の「信じる」学生との間に一定の相関関係を予想させる。

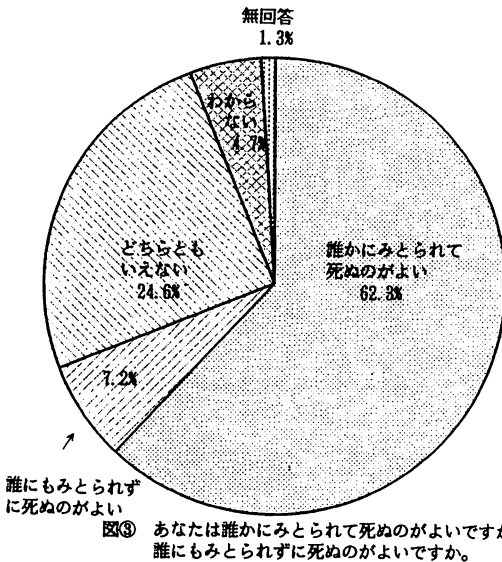
問2の「その他」として、「自然にかえる」、「土になる」、「エネルギーが宇宙にかえる」、「この世にかえってくる」、「違う物として生きている」、「聖書に記されている真実のようになる」などがあり、学生の豊かな意識

を感じさせる。そして、これらの回答の一部は、とくに再生信仰の問題とも関わるであろう。古くは人々の共通認識であった再生観は、魂不滅の思想の典型例であり、過去、現在、未来を一体として捉え、あの世とこの世を連続したものと見做すものである。<sup>(1)</sup>ともかく、再生観にせよ来世信仰にせよ、それらによれば、魂はどこかで生き続けることになる。

他方、魂というのは意識の働きであり、この意識の働きは頭脳の働きであるから、人が死んで頭脳が腐敗してしまえば、意識の働きも失せ魂も消失すると考えるのは、上記の再生観や来世信仰とは相容れない一個の常識的理解であると思われる。<sup>(2)</sup>しかし、すでに紹介した通り、半数近くの学生は「魂が他の世界へ行く」として、こうした理解を示さなかった。過半数の学生により死後の世界が信じられている以上、何かがその世界に到達しなければならない。それが魂なのである。実際、問1で死後の世界を「信じる」と答えた学生の中には、問1の①でその理由として「魂などが人にはあると考えていて、その魂だけ集まる所があると思うから」、「身体は死んでも魂は生きていて、その魂の生きる場所は必ずあるから」、「死後、体とは違う人間の精神の行き場所はあるはずだから」などを挙げる者が少なくないのである。ちなみに、これらの学生はいずれも県内の学生であるが、その理由づけは沖縄の民俗的風習とも関係するのであろうか。この点に関し、沖縄人の再生信仰を理由に、沖縄には死者の魂が赴くこうした他界への信仰は存在しなかったであろうとする学者もいる。<sup>(3)</sup>ここでは、魂が他界で生き続けるのか(来世信仰)、それともこの世で別人・別物として生まれ変わるのか(再生観)、が問われる。県内・県外を問わず、魂の行き場所としての死後の世界が有力に支持されている一方で、すでに触れた通り、「この世にかえってくる」、「違う物として生きている」といった再生観に根ざした回答も見られた。いずれの場合においても、魂の存在・不滅が前提とされていることは確認されるのであるが、今回の分析ではこれ以上立ち入らない。

③ 問3 (図③) では、「誰かにみとられて死ぬのがよい」が圧倒的に多い。

ちなみに、日本人の遺体観念を考察したある研究で、日本人は死の間際にできるだけ多くの身近な人にみとってもらうことを重視していること、死体が誰からも護られずに放置されていることは非常に忌み嫌われること、などが指摘されている。上記の調査結果と照らし合わせても、興味深い指摘である。



では、なぜ「誰かにみとられて死ぬのがよい」のか。その理由をたずねる問3の①では、一人で死ぬことのさびしさ、むなしさ、おそろしさを挙げる者が非常に多い。また、自己の存在の他者による再認識、遺体処理への気遣いを挙げる者も少なくない。他には、死亡したことの確認、「誰かに一言いったり、誰かを一目見たいから」、「遺言などを

残すため」、「人の死をみとるのは、生き残る人にとっていい体験になるから」などがある。これらは、死の受容の仕方、そのあり方とも関係するであろう。この方面は、いわば死の医学として今後益々大きな問題になるものと思われる。

さらに、「誰かにみとられて死ぬのがよい」の興味深い理由として、「誰にもみとられなかったら、あの世へ行っても悔いが残り、この世に戻ってきそうだから」や「誰にもみとられずに死んだら、この世に何かを忘れてしまいそうだから」がある。両者とも、死後の世界や死後の靈魂の生存を前提にして語られた理由である。こういう形で、問1・問2と問3が関連することは予想外であった。もっとも、死者が「遺体」という形をとって、関係者に対して何らか

の意思や権利や要求を突きつけているとする意味での遺体観は、日本人に伝統的なものである。<sup>(6)</sup>前記の学生の理由は、こうした遺体観との結びつきを予想させもする。また、この問題に関しては、前稿でも紹介したが、「人の生死は、全て本人にその権利があると思う。私には、人の精神と肉体を分けて考えるので、死体の処理も本人が望む通りにしてほしいと思っている。脳死は人の死だと思うが、死後の世界は誰にも分からないと思っている。だから、死後の肉体の処理も、本人の宗教観や死生観に乗っかってあくまでも本人の意思を尊重すべきだと思う」という、脳死と死生観をめぐる詳細な感想も寄せられていた。ここでは「生者の価値がなぜ死者の価値をうわまわるのか」という根本的な疑問が、「死者の意思を如何に実現するか」という形で提起されているように思われる。この感想を、やはり前稿で紹介した次の感想と対比すると、非常に興味深い。脳死と臓器移植に関する「こういった問題は上の人が決めるのではなく、国民の合意によって定まるべきものと考え。要は、この社会は現実に生きている人によって成り立っている。生きている人の意思を尊重すべきなのだ。死人には基本的人権はない」。この学生は、本人の意思よりも残された者の意思を脳死移植問題で重視すべきだとしている。しかし、この「死人には基本的人権はない」とする考えはどちらかといえば少数であり、多くの学生は死者やその意思に格別の意味を認めていたといえる。<sup>(6)</sup>

ところで、不慮の死・事故死では、誰にもみとられずに死ぬことが一般的であろう。この点に関して、ある学生は問3で「どちらともいえない」を選択しつつ、アンケート末尾の感想記入欄では「僕の理想とする死に方は、たとえば交通事故などで『即死』するパターンです」と興味深いことを述べている。痛による死と心筋梗塞による死のどちらを選ぶかをめぐり、日本では「あという間に死ぬ」という理由から9割以上が後者を選ぶのに対して、アメリカでは3割程度が前者を選ぶとされる。<sup>(7)</sup>この学生などは、そうした日本人の意識を垣間見させる。「死の準備教育」が進められつつあるアメリカと、何かにつけ

死を「伏せ字」にする日本との文化的違いであろうか。

他方、「誰にももとられずに死ぬのがよい」の理由をたずねる問3の②では、「自分は静かに死んでしまいたいから」、「自分のことを完全に忘れてほしいから」、「人がまわりにいると別れが辛いから」、「他の人を泣かせたくないから」、「自分の死顔を誰にも見せたくないから」、「苦しんで死ぬのなら、悲惨な姿を見られたくないから」などが挙げられている。これらの理由では、周囲の者への配慮、品位や尊厳の維持なども問題になっているようである。

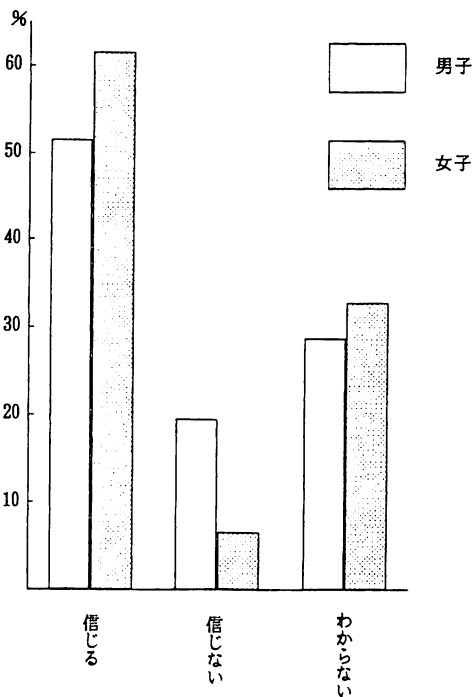
## (2) 県内男子学生と県内女子学生の比較

以下では、県内の男女学生

について、とくに女子の回答傾向に着目しつつ分析を試みる。

① 問1 (図④) では、男女とも「信じる」が過半数に達している。男女の比較では、女子が男子を約10%上回っている。他方、女子は「信じない」が極めて少ない。性差があらわれているようである。

沖縄では、霊能者のユタが様々な観点から話題にされるが、それらの多くは、女子である。そして、県外でも、たとえばイタコやオカミサマについて、同じ特徴が見られる。



図④ あなたは死後の世界を信じますか。



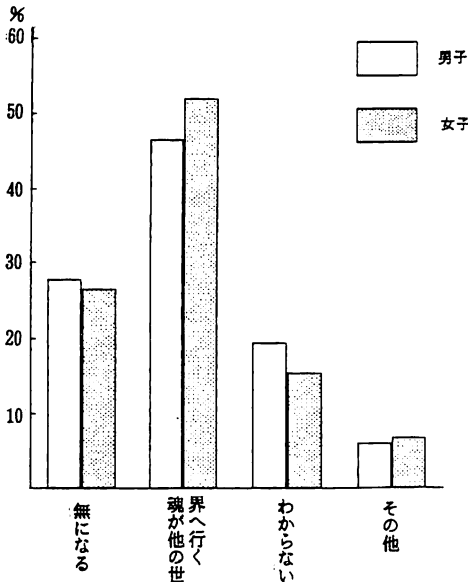
意識調査の結果は、こうした事実と結びつけて問題にすることができよう。しばしば指摘されるように、女子は予知能力をはじめとした霊能に長けている。また、女子が常日頃から祭祀に深く関わることに留意すべきである。沖縄でも、家庭の主婦ら女子が時として死者の「魂しずめ」を主宰しており、ユタ誕生の一因になったとされる。そして、ユタはその多くが来世や他界のことに関わりをもっており、死者の世界たるグショウ(後生)のことに通暁しているともされるのである<sup>(8)</sup>。

とくに女子について「信じる」理由を見てみると、「全学生」の分析で指摘したマスコミや友人・知人などからの情報によるとする者が目立って多いが、他には、世界・自然の存在自身もつ不可思議性や未解明を理由に挙げる学生も少なくない。後者の理由に関係しては、「生まれる前もこの世があることを知らなかったし、死んだ後の世界も、その存在は知られていないだけで、きっとあると思う」というものもある。なるほどと思わせる理由である。

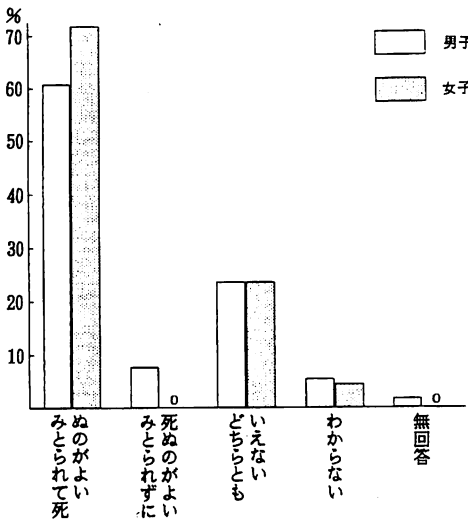
他に興味深い理由を、やはり女子について紹介しておく。「霊、俗に幽霊をよく見るし、話もするので、疑いようがない」。これは、自己の体験に基づいて語られている。彼女にとっては、死後の世界を信じるかどうかの問題なのではなく、知っているかどうかの問題なのであろう。いずれにせよ、その体験を詳しく知りたいところである。

② 問2(図⑤)では、男女とも「魂が他の世界へ行く」が半数を占めている。ただ、女子が若干多く過半数に達している。反対に、「無になる」は男子が27.6%、女子が26.1%で、それほど開きはない。ちなみに、「沖縄人の信ずるところでは、人間の靈魂は人の死んで後も永続する。だから人の靈魂は永遠不滅である<sup>(9)</sup>」とされる。この沖縄の靈魂観については、後述したい。

③ 問3(図⑥)では、男女とも「誰かにみとられて死ぬのがよい」が非常に多い。とくに女子は約10%男子を上回っている。女子の割合が多い一因として、「誰かをみとってあげたい」という心理の裏返しも、無視できないよう



図⑤ あなたは死ぬとどうなると思いますか。



図⑥ あなたは誰かにみとられて死ぬのがよいですか、誰にもみとられずに死ぬのがよいですか。

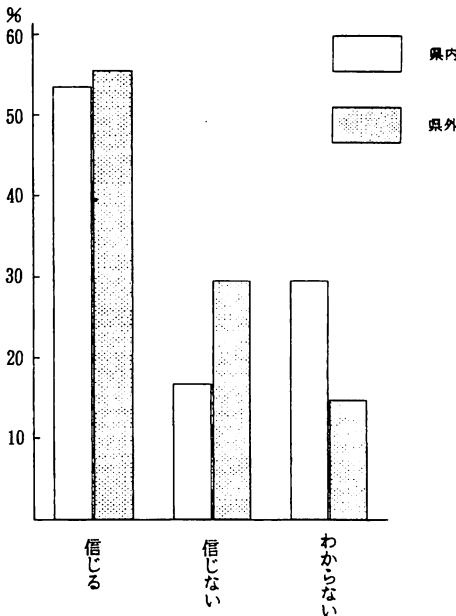
に思われる。ある女子は、みとられて死ぬのがよい理由を次のように述べている。「一人で死ぬのはすごくさびしく感じる。私のまわりに死にそうな人がいたら、私は最後はみとってやりたいと思うから」。他にも同様の理由を挙げる女子がいる。女子の場合、「見てあげたい」、「世話したい」という女子に比較的共通の心理が、裏側から回答へ投影されているように思われる。

他に性差との関係は不明であるが、次のように詳しくみとられて死ぬのがよい理由を語る女子がある。「死ぬ前に会っておきたい人がいるし、自分が死ぬことで悲しむ人がいないように話をしてから死にたいから」、「人間は弱いものだし、それをささえてくれる人間を探すために人生があると思うので、死ぬ間際にだって誰かにいてほしいと思います」。

### （3）県内学生と県外学生の比較

回答者の割合は、県内学生209名に対して県外学生27名である。したがって、適正な比較を行なうことはできず、信頼するに足る分析も期待しえない。以下では、ごく大雑把な傾向を指摘するにとどめたい。ただ、このような不十分なデータのもとでも、沖縄と本土の死生観・来生観の違いがある程度浮かび上がってくるように思われるのは興味深い。

① 死後の世界の存否を問う問1（図⑦）では、県内学生と県外学生とも、「信じる」がほぼ同率で半数を超えている。しかし、「信じない」の回答は県外学生が県内学生を上回っている。逆に、「わからない」は県内学生が県外学生を上回っている。両者間で「信じない」と「わからない」の割合がほぼ正確に逆転した格好である。



図⑦ あなたは死後の世界を信じますか。

「信じる」理由としては、すでにたびたび紹介してきたように、マスコミ、友人・知人の影響を挙げる者が多い。県内学生の中には、他に「子供の頃からあたり前のように聞かされているから」や「ユタの言葉から」を挙げる者があり、沖縄の独自性を感じさせもする。この沖縄の独自性という点であるが、筆者が当地に赴任して興味深く思ったことの一つに墓制がある。墓の大きさや形が本土のそれとは随分違うこともそうである。

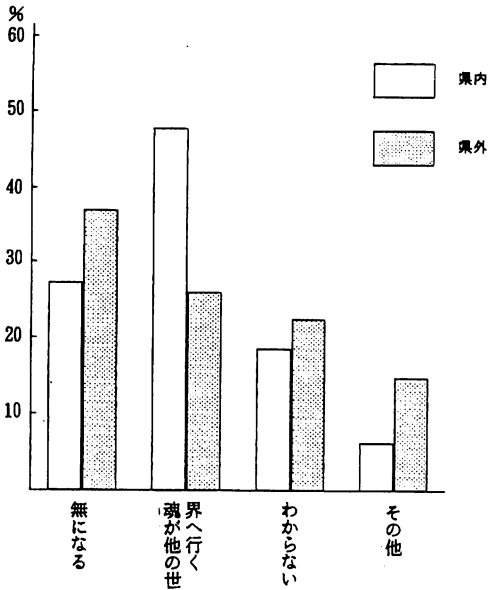
が、何よりも住宅のすぐ裏や隣に墓（地）が存在することに大変驚いた。今にして思えば、沖縄では、来世を「今日そのままの延長と見る<sup>10</sup>」とか、グショウ（来世）が「ことのほか近い所と考えられている<sup>11</sup>」といわれるように、生と死が靈魂の存在を媒介として比較的連続した関係で捉えられていること、そして、上述した墓の在り方はそうした関係の一個のあらわれなのであろうこと、に気づかされる。また、祖靈の居場所としての門柱墓に見守られるという意味においても、靈魂や墓の存在が比較的近いものとして認識されているように思われる。他方、母体を形どっていると考えられる亀甲墓では、その墓口が性器をあらわしており、人を胎内で生まれ変わらせるという再生の思想があるという<sup>12</sup>。このように、沖縄では、墓制と死生観や靈魂観がとりわけ密接な結びつきをもって語られている。

県外学生について他の「信じる」理由をまとめると、靈体験や帰依する宗教を挙げる者が複数名いる。前者に関係しては、「私は幼い頃から靈を見たり、感じたりして、おはらいをうけたりしていたから」というものもある。ここでは、すでにいくつか紹介したところの靈体験が語られている。

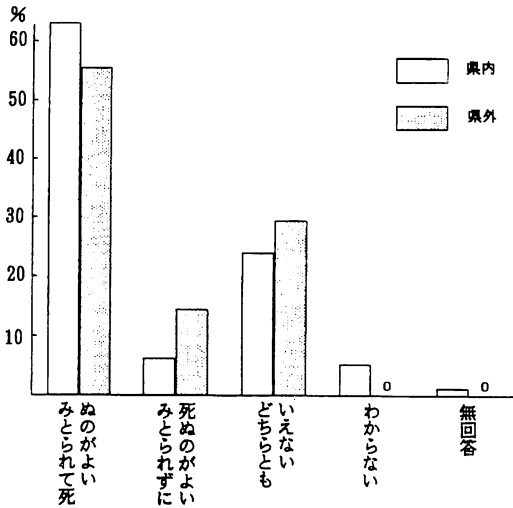
他方、県外学生の「信じない」理由としては、非科学性、「人が死ぬことは、無になることだと自分は思うから」、「生き物は、皆死んだら死んだ瞬間から違う生き物として生まれ変わっていると思うから」などがある。後者の理由は、すでに触れた再生観の典型であろう。

② 死ぬとどうなるかを問う問2（図8）では、両者の間にやや違った傾向が見受けられる。県内では「魂が他の世界へ行く」が回答のほぼ半数を占めているのに対して、県外では約4分の1にとどまっている。その分県外では「無になる」が高い割合を示している。沖縄独特の死生観・靈魂観が存在することを示唆しているのであろうか。たしかに、靈魂と肉体とは別個のものであるという意識が本土よりも一層強い沖縄では、この（靈）魂をめぐって実に豊かな理解が示されているように見える。たとえば、死者の魂たるシニマブイ（死靈）

と生者に宿るイチマブイ(生魂)が区別される。人が死ぬということは、イチマブイがカラダ(肉体)から永久に離脱することであり、その人に死霊がつくということであるという。上記のような魂をめぐ<sup>00</sup>る理解が、程度の差こそあれ、多くの県内学生に影響を及ぼしているのではあろうか。もっとも、そうした靈魂観に精通している県内学生は今日思いの外少ないことが、その後の学生に対する聞き取り調査や雑談・対話などで筆者の知るところとなっている。したがって、多くの学生の理解としては、漠然と魂の存在を信じているという程度の域をでていないようである。しかも、それらは沖縄独自のマブイ的なものというよりは、マスコミなどを通しての通俗的オカルト的なものようである。マブイという言葉すら知らない学生も少なくない。しかし、そうではあるとしても、県内の学生が魂の存在を沖縄の民俗的伝統のようなものに根ざして信じていることも完全には否定できないように思われる。前稿ですでに紹介した通り、ある県内学生が「沖縄の場合、死後も肉体に魂が宿っていると考えているので、脳死と判定して臓器を取りだして、他人に移植することもよいとは思えない気がする。文化的背景からも肉体を切りきざむのはよくない」として、魂と肉体の特別の関係を問題にしていたのが思いだされる<sup>00</sup>。ただ、「死後も肉体に魂が宿っている」という場合、死の直後であることからイチマブイが肉体から離脱しきっていないと考えているのか、それともシニマブイがすでに宿ったと考えているのか、あるいはまったく別のイメージを描いているのか、などは不明である。なお、やはり前稿で紹介した通り、「现阶段では、臓器移植はなされたとしても一年ももたない傾向があるが、それはやはり人間の身体と魂が密接につながっていると思うからです。魂には関係なく身体の一部から臓器を取りだし、他人の身体に取りついたりしても、身体がもたないのは当然だと思います」と語る県内の学生もいた<sup>00</sup>。こうした遺体に対する特別の感情は、沖縄の「献体思想の低さ」という形で非難されもする。いずれにせよ、肉体や臓器は魂の宿り場であり、魂は死により離脱してもまた戻るかもしれず、戻らない場



図⑧ あなたは死ぬとどうなと思いますか。



図⑨ あなたは誰かにみとられて死ぬのがよいですか、誰にもみとられずに死ぬのがよいですか。

合でもしばらくは宿り場にこだわるものだという古代の殯儀礼に関わる観念は、県内・県外を問わず、依然日本で生き続けているのかもしれない。そして、こうした遺体へのこだわりが、臓器移植への一つの強力な抵抗になることは否定できないであろう。

③ 問3 (図⑨)でも、両者の間に違った傾向が見受けられる。県内・県外とも「誰かにみとられて死ぬのがよい」が多いものの、県内の方が約10%高い割合を示す。反対に「誰にもみとられずに死ぬのがよい」は県外で高い割合を示している。

「誰かにみとられて死ぬのがよい」の理由として、すでに紹介した通り、県内・県外共通に、さびしさ、むなしさ、おそろしさを挙げる者が多い。他に県外学生について理由を見てみると、「最後に何かをいって死にたいから」、

「自分が確かに死んだということ、周囲の者たちにはっきりと知らせたいから」、「死後の後始末をしてもらいたいため」、「自分が死んでも、ある人の心の中で生きていたいから」、「自分の親が死んだ時みとれなくて、死んでから3年たった今でもまだ親が生きているような気がするので何かすっきりせず、自分の子などには、そういうふうにはなあってほしくないから」などがある。もっとも、これらの理由は、とくに県外の地域性を示すものとはいえない。

他方、「誰にもみとられずに死ぬのがよい」の理由をやはり県外学生について見ると、「湿っぽいのはいやだから」、「自分の結末に幕を引くのは自分であり、他人は傍観者にすぎないから」などがある。

- (1) 赤田光男『祖霊信仰と他界観』33頁（人文書院、1986）。
- (2) 森三樹三郎『生と死の思想』64頁（人文書院、1990）。ちなみに、沖縄でも、イチマブイ（生魂）とシニマブイ（死霊）を区別するが、生者に宿るイチマブイは、やはり意識を意味しているとの見解がある。又吉正治『靈魂とユタの世界』28頁以下（月刊沖縄社、1987）。
- (3) 酒井卯作『琉球列島における死霊祭祀の構造』339頁以下（第一書房、1987）。もっとも、マブイが具体的にどのように再生するかは、筆者の乏しい読解力のため本書からは不分明である。
- (4) 波平恵美子『脳死・臓器移植・がん告知—死と医療の人類学—』21、60～61頁（福武書店、1988）。
- (5) 波平・前掲注(4) 46～47頁参照。
- (6) 以上の学生の意識につき、拙稿「大学生の脳死と臓器移植をめぐる意識」*沖大法学*11・12合併号131～132頁（1991）。
- (7) 水野肇『脳死と臓器移植』93頁（紀伊國屋書店、1991）。
- (8) 谷川健一「ユタと沖縄の人びと」『谷川健一著作集 第6巻』404～406頁（三一書房、1981）。さらに、谷川によれば、ユタは僧侶に

かわって死者の世界を司ると形容される。谷川「あかるい冥府」『谷川健一著作集 第6巻』252～253頁。

- (9) 照屋寛範『沖縄の宗教・土俗』57頁(星印刷所、1957)。
- (10) 照屋・前掲注(9)93頁。
- (11) 高江洲義英「南島のコスモロジーと死者儀礼」現代思想12巻7号113頁(1984)。
- (12) 比嘉朝進『沖縄の信仰用語』31頁(風土記社、1991)。なお、名嘉真宜勝、恵原義盛『沖縄・奄美の葬送・墓制』152頁(明玄書房、1979)。

ただし、「亀甲墓母体説」を否定する研究も有力である。沖縄タイムス1992年1月27日付夕刊参照。

- (13) 桜井徳太郎、谷川健一、吉野裕子「鼎談 沖縄の生と死—日本人の死生観の原像をもとめて—」『伝統と現代保存版』86頁(伝統と現代社、1983)。
- (14) 植松明石「死者・先祖—沖縄、台湾(漢人社会)の事例から—」沖縄文化研究14号138、145頁(1988)、谷川健一『民俗論の原像』180頁(伝統と現代社、1974)。

もっとも、イチマブイとシニマブイの関係は微妙であり、同じものが変化するのか、それとも本来別個の存在なのかは明確でないと思われる。桜井徳太郎『沖縄のシャマニズム—民間巫女の生態と機能—』35～36頁(弘文堂、1973)。この点に関し、あるユタはイチマブイがシニマブイに変化すると主張している。月刊沖縄社編『ユタと霊界の不思議な話』98頁(月刊—繩社、1990)。

- (15) 拙稿・前提注(6)123頁。
- (16) 拙稿・前提注(6)126頁。
- (17) 佐々木宏幹『聖と呪力』37頁(青弓社、1989)。



### 三 おわりに

筆者の沖縄における生活もすでに4年を経過し、わずかながらではあるが、筆者自身の沖縄への関心をまとまった形で捉えることができるようになりつつある。先の拙稿と併せて、今回、ささやかながら沖縄をテーマに考察をめぐらすことができたことを、心から嬉しく思う。もっとも、本稿は何分にも限られた資料に基づく分析であるため、今後もこの種の調査を継続して行ない、資料の蓄積に努める必要を感じる。幸いにして、現在、宇流麻学術研究助成基金からの援助を得て、県内医療関係者に対する同様の調査を実施中であり、差しあたりその分析に期待したい。

[付表1]

1. 全学生の意識

問1 さっそくですが、あなたは死後の世界の存在を信じますか。

1 信じる	53.8%
2 信じない	18.2%
3 わからない	28.0%

問1の①「信じる」と答えた人はその理由を書いてください。(省略)

問1の②「信じない」と答えた人はその理由を書いてください。(省略)

問2 あなたは死ぬとどうなると思いますか。

1 無になる	28.4%
2 魂が他の世界へ行く	45.3%
3 わからない	19.1%
4 その他	7.2%

問3 あなたは誰かにみとられて死ぬのがよいですか、それとも誰にもみとられずに死ぬのがよいですか。

1 誰かにみとられて死ぬのがよい	62.3%
2 誰にもみとられずに死ぬのがよい	7.2%
3 どちらともいえない	24.6%
4 わからない	4.7%
5 無回答	1.3%

問3の①「誰かにみとられて死ぬのがよい」と答えた人はその理由を書いてください。(省略)

問3の②「誰にもみとられずに死ぬのがよい」と答えた人はその理由を書いてください。(省略)

[付表2]                    2. 県内男子学生と県内女子学生の比較

		県内男子学生	県内女子学生
問1	1 信じる	51.5%	60.9%
	2 信じない	19.6%	6.5%
	3 わからない	28.8%	32.6%
問2	1 無になる	27.6%	26.1%
	2 魂が他の世界へ行く	46.6%	52.2%
	3 わからない	19.6%	15.2%
	4 その他	6.1%	6.5%
問3	1 誰かにみとられて死ぬのがよい	60.7%	71.7%
	2 誰にもみとられずに死ぬのがよい	8.0%	0%
	3 どちらともいえない	23.9%	23.9%
	4 わからない	5.5%	4.8%
	5 無回答	1.8%	0%

[付表3]                    3. 県内学生と県外学生の比較

		県内学生	県外学生
問1	1 信じる	53.6%	55.6%
	2 信じない	16.8%	29.6%
	3 わからない	29.7%	14.8%
問2	1 無になる	27.3%	37.0%
	2 魂が他の世界へ行く	47.9%	25.9%
	3 わからない	18.7%	22.2%
	4 その他	6.2%	14.8%
問3	1 誰かにみとられて死ぬのがよい	63.2%	55.6%
	2 誰にもみとられずに死ぬのがよい	6.2%	14.8%
	3 どちらともいえない	23.9%	29.6%
	4 わからない	5.3%	0%
	5 無回答	1.4%	0%